

2017/5/30

「故郷を離るる歌・旅愁」の思い出

「故郷を離るる歌」

大正2年出版の「新作唱歌第5集」に掲載された日本の唱歌です。

戦前の女学校では合唱曲の定番として歌われていました。

女学校に通っていた姉もよく歌っていました。

作詞は「早春賦」の作詞者として有名な吉丸一昌（1873～1916）です。

原曲は、ドイツ民謡“Der letzte Abend”（最後の夜）です。

家庭の事情で好きな女性と結婚できず、彼女と別れた最後の夜を嘆き悲しんで、彼女の幸せを願うという悲恋の歌です。

菅原洋一の「今日でお別れ」みたいな感じの歌でしょうね。

いい歌ですが、作詞・作曲者や作曲された年代などは一切不明です。

ただ、ドイツ中部フランケン地方の民謡ということだけ分かっています。

ドイツ民謡なのに、肝心のドイツでは、全くといっていいほど忘れ去られた寂しい存在です。

日本で歌われている「故郷を離るる歌」では、別れを告げるという内容は原曲と同じですが、その対象が女性ではなく、自分の生まれ育った故郷の懐かしい情景に向けられている、と思いきや、そうではないんです。

故郷を歌いつつも、実は先立たれた前妻ユキへの鎮魂歌だったのです。

吉丸は明治43年末から正月にかけて、故郷の大分県臼杵に帰郷し亡き妻ユキの墓参りをします。そのあと、その心情を「故郷を離るる歌」に込めました。

ユキに捧げるかのように、歌いだしは美しい草花です。

1番の「♪今日は汝を～」の「汝（なれ）」は亡き妻のことで、3番で「静かに眠れ」と呼び掛けます。

ツクシを摘んだ岡辺、社の杜、小鮒を釣った小川、柳の土手、すべてユキとの思い出の場所です。

これを最後に自分は東京に戻り、自然がいっぱいの臼杵での生活とはおよそかけ離れた都市生活に戻らなければならない。

故郷を捨ててしまうという自責の念が、2番の「別るゝ我をあわれと見よ」という言葉となったのでしょう。

何度聴いても心が洗われる歌です。亡き妻への鎮魂歌と聞くと尚更です。

「旅愁」

1907年（明治40年）に発表された音楽教科書「中等教育唱歌集」で取り上げられて以来、日本人に広く親しまれてきました。

原曲はジョン・P・オードウェイによる“Dreaming of Home and Mother”（家と母を夢見て）というアメリカの歌です。

歌詞は詩人の犬童球溪（いんどうきゅうけい）が訳した唱歌です。

これまた懐かしいんです！ もう70年も昔になりますが、このレコードが家にあったので、よく「ちこんき」（蓄音機）で聴いていました。

レコード集めは父親の趣味だったようで、カルーソーの「オソレミオ」、藤原義江の「出船の港」、三浦環の「庭の千草」などの歌曲がありました。

「旅愁」は、関屋敏子が歌っているビクター盤で、「故郷の廃家」とカップリングされていました。そのレコードがYoutubeでアップされているのを見つけたんです。
<https://www.youtube.com/watch?v=iCddfsGCpU8>

昔聴いた「旅愁」のレコードを聴くと、空襲の不安におびえ、いつも飢えていた当時のことが思い出されます。

レコードが最も身近な娯楽だったので、家に友だちがやってきたときはいつもレコードを掛けていました。

「ちこんき」の針は本来鋼鉄製でしたが、戦争のために鋼鉄製は竹製に代わっていました。それすら親は買ってくれなかったので竹ヒゴで作りました。

音が小さくて、すぐへばるので1回しか使えませんでした。

そんなことをしてまで独りで「ちこんき」を聴いていた、ちょっと変わったひろし少年でした。

亀岡弘志（記）